

# 病害虫発生予察情報（3月予報）

令和2年2月26日

静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
チャ	赤焼病	発生量：やや多 (発病葉数 0.2 枚/1.25m <sup>2</sup> )	2月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	カンザワハダニ	発生量：やや少 (摘採面寄生葉率 1.4%)	2月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
トマト	灰色かび病	発生量：多 (発病株率 6.9%)	2月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±～-)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 6.6%)	2月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±～-)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：多 (発病株率 2.7%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 2.6%)	2月中旬発生量 黄化葉巻病：多(+) コナジラミ類：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
タマネギ	腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 4.6%)	2月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率 0.0%)	2月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率 39.6%)	2月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 1.2%)	2月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 2.9%)	2月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 9.7%)	2月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：多 ただし中遠地域は、やや少 (寄生株率 13.4%)	2月中旬発生量：多(+) ただし中遠地域は、少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 1.5%)	2月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は  
こちらで  
検索!



静岡県農薬安全使用指針  
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【チャ】

#### <生育の概況>

例年に比べ、寒害と思われる症状の発生はみられなかった。

#### ●赤焼病

##### 予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率は0.12枚/1.25m<sup>2</sup>（平年0.01枚）と平年より多い発生であった。1～2月の多雨が影響していると考えられる。ただし暖冬傾向のため、凍霜害に伴う多発は観察されていない。
- ・ 1か月予報では、降水量が平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない。

##### 防除対策

- ・ 幼木園や「つゆひかり」は特に弱いので発生に注意する。
- ・ 昨年発生が見られた茶園や常発茶園では、3月上旬に薬剤による防除を行う。発生が広がるようであれば、1回目防除の20日後を目処に追加防除を行う。
- ・ 本病は、強風雨などで障害を受けると発生が助長される。現在、発生が見られない茶園でも、これからの発生に注意し、発生が見られたら早めに防除する。

#### ●カンザワハダニ

##### 予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率は0.1%（平年0.8%）、裾部での寄生葉率は0.4%（平年2.4%）で、平年より低い発生であった。
- ・ 休眠調査の結果、越冬雌成虫は、調査時点で80.5%（平年83.4%）が休眠から明けており、産卵を始めている。1か月予報では、気温は高いことから、新幼虫の発生が平年に比べ早まることが予想され、現在寄生密度の高い園では防除が必要である。

##### 防除対策

- ・ 摘採面の葉に寄生が見られる茶園では早めに防除を行う。散布薬量は400リットル/10aを目安に、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・ 裾部の葉に寄生が見られる茶園では、発生に注意し、ハダニが摘採面に上がってくるようであれば早めに防除を行う。
- ・ 平年に比べ、気温・湿度が高い条件下では、天敵のカブリダニ類の活動が活発化し、ハダニの増殖を抑える働きが高まる。天敵が確認される茶園では、天敵への影響の少ない殺ダニ剤を選択し、天敵の保護を図る。

#### <その他病害虫>

#### ●チャトゲコナジラミ

- ・ 昨年チャトゲコナジラミが多発した茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。カンザワハダニとの同時防除を兼ねて、両種に適用のある薬剤を用いる。幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように丁寧に散布する。

## 【トマト】

### ＜生育の概況＞

生育は平年並である。

### ●灰色かび病

#### 予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は12.3%（平年5.1%）と平年より多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をやや助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（例として、不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最少限にする）。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。薬剤耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
- ・ 発病した果実や茎葉の表面には病原菌の胞子が多量に形成されて伝染源となる。そのため、発病部位および残渣は速やかにほ場の外に持ち出して処分する。
- ・ 植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

### ●葉かび病、すすかび病

#### 予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.1%（平年7.7%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・ 本県では、12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

### ●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

#### 予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率3.8%（平年2.7%）と平年より多い発生であった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率9.8%（平年2.2%）と平年より多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

## 防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野生生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

## 【タマネギ】

### <生育の概況>

生育は平年に比べ1週間程度早まっており、収穫済みのほ場が7～8割程度ある。

### ●腐敗病

#### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均発病株率が5.0%（平年1.1%）と多かった。例年よりも気温が高く、降雨も多かったのが影響したと考えられる。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・収穫時期を迎えているほ場では、できるだけ降雨の前に収穫し、降雨後は、鱗茎が十分乾いた後に収穫する。
- ・罹病株は、ほ場付近に放置すると発生源となるため、ほ場外に持ち出して処分する。

### ●灰色腐敗病

#### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、発生が認められなかった（平年発病株率0.0%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない。さらに、本病は平成19年3月を最後に、過去10年間巡回調査で発生が確認されていない。したがって、伝染源が全く無いか、あっても極めて低密度であると考えられるため、3月においても発生は無いものと予想される。

#### 防除対策

- ・巡回調査ほ場以外のほ場では発生している可能性が無いとは言い切れない。罹病株がある場合には、早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分することで来年度の伝染源にならないようにする。

### ●ネギアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は72.0%（平年35.7%）と平年より高かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の増殖を助長する。

## 防除対策

- ・ 平年に比べ気温が高いため、すでに生息密度が高いほ場が多数認められる。しかし、収穫期を迎えているほ場では、特に防除の必要はない。中～晩生品種など収穫までの期間に余裕があるほ場では発生に注意し、密度が高まる前に薬剤防除を実施する。
- ・ 株元の葉と葉の隙間に多く生息しているので、その部分に薬剤がかかるようにていねいに散布する。また、周辺の収穫期を迎えているほ場に薬液が飛散しないように、風のない時に散布する。

## 【イチゴ】

### <生育の概況>

生育は平年よりやや早い地域からやや遅い地域まであり、地域によってばらつきがある。

### ●うどんこ病

#### 予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.1%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 本病は気温が20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年よりも高く、本病の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・ 株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・ 初期発生に注意し、現在発病が少しでもみられるほ場では、早急に防除を行う。
- ・ 今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

### ●灰色かび病

#### 予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.5%（平年1.2%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 本病は気温が20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、ハウス内は本病の発生にやや適する。

#### 防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最小限にするなど）。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除くとともに、枯葉、老化葉、不要な果梗枝も取り除き、ほ場外で埋没処分する。

### ●アザミウマ類

#### 予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は13.7%（平年4.1%）、発生面積率は66.7%（平年33.8%）と平年より多い発生であり、過去20年間で最も発生が多かった。
- ・ 1か月予報では気温は平年よりも高く、本種の発生を助長する。

## 防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・アザミウマ類の早期発見に努め、発生初期に薬剤散布を重点的に行う。
- ・天敵を利用している場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。
- ・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ・施設内外の雑草や花き類は、アザミウマ類の発生源となるため、除去する。
- ・施設開口部には防虫ネット（目合1mm以下）を被覆し、施設外からの成虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。
- ・栽培終了後は施設を密閉して、蒸し込み処理を10日以上行い、残存虫を死滅させる。

## ●ハダニ類

### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は東部地域では9.8%（平年7.2%）、中部地域では32.0%（平年17.9%）と平年より多い発生であったが、中遠地域では5.0%（平年9.7%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど迅速に対応する（ただし、農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤（気門封鎖剤）や天敵を利用する。なお、物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待できないため、5日前後の間隔で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。薬剤散布する場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.9%（平年1.2%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・1か月予報では気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

### 防除対策

- ・アブラムシ類の発生に注意し、初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシ類のマミーの発生状況をよく観察する。薬剤散布する場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

## <その他の病害虫>

### ●炭疽病

- ・ 2月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は2.0%（平年0.7%）と発生は平年より多かった。
- ・ 発病ほ場では、ハウス内温度が高いと今後も新たな枯れこみが発生する。本病は高温多湿条件下で多発するため、天窓、側窓の開閉により、ハウス内の気温の過度な上昇をさける（発病適温は25～30℃）。
- ・ 発病を認めた場合は、直ちに発病株を抜き取り、ビニール袋に入れハウスの外に持ち出し処分する。

## 【イネ】

### <その他病害虫>

#### ●いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

##### 防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・ 自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・ 「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<http://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・ 厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

##### 育苗管理

- ・ 出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・ シルバーポリシートによる育苗では高温多湿になりやすいため、換気を行い温湿度管理に注意する。
- ・ いもち病は、本県ではMBI-D剤（ウィン、デラウス、アチーブ）耐性菌の発生事例がある。また、県内で発生は確認されていないが、他県ではQoI剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）耐性菌の発生が問題となっている。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<http://www.s-boujo.jp/>）」の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料の掲載について」の項を参照）。

#### ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

##### 防除対策

- ・ 県内全域で分布が徐々に拡大している。昨年は暖冬の影響で多発したが、今年も暖冬であり、今後も気温が高くなる予報であるため注意を要する。
- ・ 昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 本種は低温に比較的弱いため、地表面の貝は1～2月に死亡する可能性があるが、土中の貝は生き残るため、3月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・ スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。



## 【コムギ】

### <その他病害虫>

#### ●うどんこ病

##### 防除対策

- ・昨年4月下旬の巡回調査において、本病が多発していたほ場がいくつか見受けられた。本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱いことが分かっている。また、本病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意し、防除を検討する。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

## 【カンキツ全般】

### <その他の病害虫>

#### ●かいよう病

- ・昨年9～10月に台風15号と19号が襲来したことから、強風雨によって果実や葉・夏秋梢への本病原細菌の感染が拡大した可能性がある。
- ・暖冬の影響で越冬菌量も多いと予想されるため、伝染源となる夏秋梢の切除に努め、中晩柑類では3月の発芽前に薬剤散布による防除を行う。昨年、うんしゅうみかんで本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。また、防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・農薬による防除については「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ <http://www.s-bo.ujo.jp/>）」を参照する。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報 (東海地方 令和2年2月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 2月22日から3月21日

#### 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、高い確率60%です。

#### 【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	10	30	60

#### 【予報の対象期間】

1か月 : 2月22日(土)～3月21日(土)

1週目 : 2月22日(土)～2月28日(金)

2週目 : 2月29日(土)～3月6日(金)

3～4週目 : 3月7日(土)～3月20日(金)

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1  
TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780  
URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>